日本図の変遷
～赤水から伊能へ～

小野寺淳　平井松午

……5

ベトナム漂流民引き取りに長崎へ

長久保赤水は、一七一七（享保二）年常陸国赤浜村（現茨城県高萩市）で生まれた。通称は源五兵衛、名は玄珠といった。「改正日本輿地路程全図」には、「長久保玄珠」と記している。医師鈴木玄淳の塾で主に漢文や漢詩を学びながら、医学も影響を受けたであろう。その後、徳川光圀が設立した『大日本史』の編纂局・彰考館総裁の朱子学者名越南渓に学んだ。

六〇（宝暦十）年、方位磁石を持って陸奥・出羽・越後へ仲間とともに旅に出る。この時の旅日記は、赤水の甥長久保中行が頭注を付けて九二（寛政四）年に『東奥紀行』として刊行された。壺石と呼ばれていた石碑を多賀城碑と呼んだのは赤水といわれ、臭水と呼ばれた石油のことなど越後七不思議を記す。

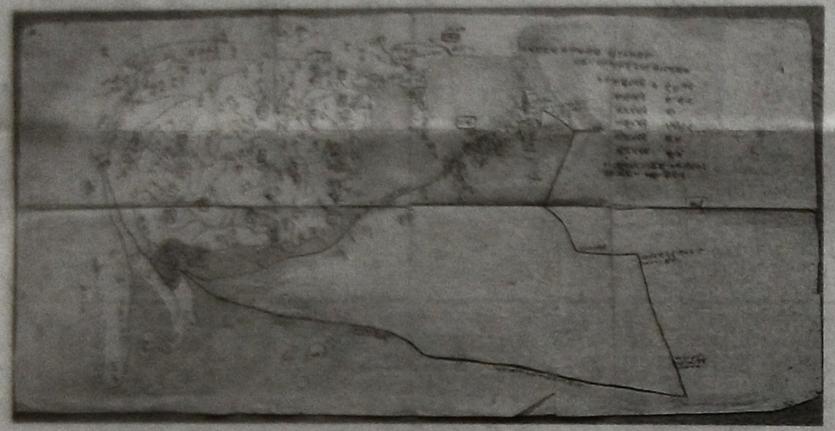
六二年には京へ旅したことを、赤水の功績を顕彰する「長久保赤水顕彰会」の横山功氏が明らかにした（「長久保赤水の京都旅日記」ゆずりは八号）。赤水の京での滞在は十一日間で、神社仏閣巡りを楽しんだようである。

安南国（現ベトナム）に漂着した常陸国磯原の漁民四人が清国の船で長崎へ送られてきた。六七（明和四）年、藩命により水戸藩役人に同行して、赤水は漂流民引き取りに長崎へ赴いた。本来は磯原村庄屋が身元引受人で迎えに行くところ、漢文の読み書きに堪能でもあり、代役の機会を得た。

没後の一八〇五（文化二）年に刊行された『長崎行役日記』を読むと、赤水はオランダの歴史や国柄はもとより、習俗や衣装、食べ物などにも関心を持ち、長崎の特殊性も記載している。長崎からの帰路も、水戸藩役人と同道であったためか、知識人との交流を示唆する記述があまり見られない。

『安南国漂流物語』（『安南国漂流記』）には漂流の経緯、ベトナムでの生活に関する見聞が記載されている。麦は栽培されておらず、米の二期作が行われ、貧しいものでも米を食すると記すなど、農民であった赤水の関心が読み取れる。赤水の子孫宅には「安南国漂流図」も残されており、いかに漂流してたどり着いたかを聞き書きして描かれた興味深い図である。漂流民引き取りの功績もあり、翌明和五年に長久保赤水は水戸藩郷士格となった。

（おのでら・あつし＝放送大茨城学習センター所長）



安南国漂流図（高萩市歴史民俗資料館　77・8×38・2㌢）

2022年11月8日東京新聞